

# 難民キャンプに図書館を

三宅 隆史



## 難民は何をキャンプに持ってこられるのか？

(社)シャンティ国際ボランティア会(以下、SVA)は、1980年にカンボジア難民の大量流出を契機に設立された。設立当初から図書館活動を中心に、タイに逃れたカンボジア難民(1980年～1991年)、ラオス難民(1985年～1992年)を対象に難民支援事業を実施してきた。2000年からミャンマー(ビルマ)からタイに逃れている難民に対する図書館活動を行っている。

難民援助というと、食糧、水、保健、衛生、シェルターの支援が思い浮かぶ。では、SVAが図書館活動を難民支援のために始めたのはなぜだろうか。理由を説明するために、一つのエピソードを紹介したい。1980年、カンボジア難民キャンプで移動図書館活動を始めたばかりのスタッフが、『バナナを食べたうさぎ』というカンボジアの絵本を抱え、キャンプを歩いていると、ある女性がその本を突然ひったくり、涙を流さんばかりにぶるぶる震えている。話を聞いて見ると、なんとその本の作者だったのだ。彼女はプノンペンで20冊ほど絵本を描いた有名な作家だった。ポル・ポト政権が1975年にプノンペンを支配し、焚書政策を行ったとき、自分の本を1冊捨て、2冊捨て、そして一番大切にしていた本も捨ててしまっ、殺される一歩手前でやっとの思いで彼女は難民キャンプにたどりついたという。

難民は、ほとんど全てを捨てて国外に逃げてきた人たちである。でも捨てられないものがある。それは、文化である。SVAは、難民の持つ文化を大切にしたい教育活動を行うことが難民の自立につながるという考えに基づいて図書館活動を実施してきた。

## タイに逃れているミャンマー難民

タイに逃れているミャンマー難民は少数民族であるカレン人およびカレニー人を含み、合計13万人で、タイ・ミャンマー国境の10ヶ所の難民キャンプで生活している。安全が保障されれば、キャンプ人口のほとんどがミャンマーへ帰還することを望んでいるが、帰還の目処はたっていないどころか、毎年新たに1万人がタイに逃れている。更に、ミャンマー国内にも、国外に逃れることのできない国内避難民が100万人以上存在する。

難民キャンプは1980年中ごろに設立された。保健、食糧、居住といった生存するための協力は援助団体によってなされている。学校も小学校から高校まであり、オランダや米国の

NGOが支援している。しかし、満たされていないニーズが二つある。一つは、文化・余暇の機会が不足していること。サッカーやバレーボール等スポーツをするスペースはあるが、本に触れる機会や子どもが安心して遊ぶことのできる場所はない。キャンプの内外での賃金労働は一切認められていないため、そもそも働くことができない。ある高校生は、「高校を卒業したら、役に立つ仕事をしたい。でも何をしたいのかわからない」と私に言った。二つめは、キャンプの少なからずの子ども、青年が、心理的な傷(トラウマ)を負っているという点である。子どもに自由に絵を描かせると、「父の死」や「紛争」、「ジャングルでの生活」といった悲惨な出来事の体験を絵に描く子どもが多い。

そこでSVAは図書館の活動を支援することにした。私たちは、これまでのカンボジアやラオスの難民キャンプでの活動の経験から、子どもの発達のためには、食べ物や住居だけでなく、本やおはなしも必要であると考えている。本やおはなしは、心の栄養なのだ。これらには、また子どもの想像力を高め、子どもたちが協力する態度や価値を高めるだけでなく、子どもの心理的な傷を癒す力もある。

## 図書館活動の支援方法

SVAは、現在メーホンソン県のメコンカ・キャンプ(15,000名)、メラマルアン・キャンプ(10,000名)とターク県のヌポ・キャンプの計3つのキャンプで図書館活動を支援している。それぞれのキャンプに2館か3館を設立し、合計で8つの図書館を支援している。これらのキャンプは全て主にカレン人が居住するキャンプである。なおこのプロジェクトはUNHCRの資金援助で実施されている。難民キャンプでの図書館活動支援は以下の方法で進めている。

### 1. 図書館委員会の設立

図書館委員会とは、図書館の運営母体である。設立運営する図書館の数、図書館のルールを決め、図書館建設の場所を選定し、図書館員を募集・任命し、図書館の維持管理に責任を負う。みんな無給のボランティアである。教員、居住セクションのリーダー、青年、女性で構成される。なるべく女性を入れて欲しいとSVA側は言うのだが、伝統的なカレン社会における性別役割分業意識のため、男女半々になることは難しい。図書館開館後起こるさまざまな問題にうまく対処できるかどうかは、図書館委員会の能力にかかっているため委員会の設立プロセスは重要だ。



メコンカ・キャンプの図書館

## 2. 図書館の建設

図書館委員会と協議して、立地条件、セクションの人口、子どものアクセスを考えた上で、図書館の建設場所を決める。建設資材は、主に竹とユーカリでこれはSVAがキャンプ外から調達輸送する。キャンプ内での森林伐採は一切禁止されているためである。屋根はキャンプ内の木から落ちてくる葉を使ってつくる。キャンプには電気がないため、室内の明かりとりように、2メートルぐらいの半透明のプラスチック板(スカイライトという)を6枚屋根につける。床は高床式である。建設作業は、キャンプの成人男性が行い、8人ぐらいでなら10日間ほどで完成する。

館内は、児童室、成人室、司書室と三部屋ある。児童室はもっとも大きく、大勢の子どもを対象に読み聞かせや文化活動(工作、歌、お絵描き、踊り)を行うことができる。本棚は耐久性を考えてスチール製のものをタイの業者に特注した。絵本の表紙を見せて並べることができ、子どもの目線を考えた高さで製作されている。

## 3. 図書館員の養成研修と支援

最も苦勞すると同時に楽しいのは、図書館員の養成・研修である。まず、図書館開館前に、選ばれた図書館員に対して図書館員養成ワークショップを4日間実施する。これは図書館活動の基礎的な理論と実践を学ぶためのものである。図書館員は養成ワークショップが実施されるまで、図書館とは静かに本を読む場所で、図書館員の役割は、本の整理・貸し出しだけだと思っていた。ところが、SVAの図書館は、うるさい場所であり、子どもが自由に学び、活動する場所である。図書館に児童館の機能が加わった場所であるといった方が近いだろう。図書館員の役割は、本の貸し出し、図書館の維持管理だけでなく、おはなしに始まり、歌、ゲーム、踊り、手遊び、工作、おりがみといった文化活動を指導することも含む。おはなしだけでも、すばなし、読み聞かせ、パネルシアター、紙芝居、布絵本などいろいろ学ぶ。図書館が開館した後は、2カ月に一度、ブラッシュアップのための研修を行っている。図書館員には毎月少額であるが、医療、教育スタッフとして手当を支援する。

## 4. 本の選定・準備・配布

難民の母語であるカレン語と将来の帰還に備えてミャンマーの共通語であるビルマ語の二言語で本を配布している。ビルマ語の大人向けの本については、ミャンマー国境のタイの街にある書店で調達できるが、カレン語の本は、ほとんではないため、SVAの日本人、タイ人スタッフおよびキャンプ内の有能な教員が日本語→英語→カレン語・ビルマ語あるいは、タイ語→カレン語・ビルマ語に翻訳する。その後訳文をコンピューターで大きさやフォントを調整し、シールに印刷し、テキストに貼りつけるという非常に手間のかかる方法で本を準備する。また他のNGOが発行した本を購入したり、難民キャンプの大人からカレン語の本を借りてコピーするという方法もとっている。子どもの本の選書の基準は、①世界中の子どもたちに30年にわたり、読みつがれている普遍的な価値のある本、②異文化を理解する本、③家族のきずなや平和の大切さを表現した本、④身体のしくみや保健、衛生に関する本、⑤環境保護についての本の5点である。現在、タイ語・日本語・英語からカレン語およびビルマ語に訳した子どもの本は、57タイトルある。各図書館に子どもの本400冊と大人の本300冊が各図書館に配布した。

## 5. 移動図書館

図書館が家から徒歩で15分以上離れたところでは、図書館に来る子どもの数は限られている。特に、3歳から7歳の子どもたちにその傾向は顕著である。そこで、保育園児および小学生低学年向けの本を箱に入れて、図書館から遠いセクションの保育園、小学校に貸し出し、巡回している。教員が読み聞かせ



メラマルアン・キャンプ図書館での読み聞かせ

をできるように、保育園および小学校教員を対象とする読み聞かせの技能についてのワークショップも実施した。

## 6. モニタリングと評価

開館後は、2週間に一度、モニタリングを行う。図書館員は、司書ノートを毎日つける。来館者数、読みきかせた本、行った文化活動、困った点、良かった点を書く。これをモニタリングの際、図書館員と話し合う。また読み聞かせや文化活動の実際を観察し、改善すべき点をアドバイスする。問題点は、本の紛失・破損、屋根の破損による雨漏り、子どもが来すぎて困る、貸し出した本を返してくれない人がいる、等々毎回さまざまだ。これらを図書館委員会、図書館員と一緒に考えていくが、すぐには解決できない問題も多い。

評価は、開館から6カ月後に行う。メコンカ・キャンプの評価では、1カ月、1館につき、子どもが1,500名、成人が600名利用していることが明らかになり、概ね目標は達成されていることが確認された。しかし、子どもの利用者のうち9割は図書館にあるすべての本をすでに読み終えていることが明らかになり、本の追加配布が必要である。毎年、10タイトル以上は、追加配布していく予定である。また大人向けには英語の本のニーズも高いことが明らかになった。

## 7. 本の出版

カレン語、ビルマ語ともに子どもの本が不足しているため、両言語による本の出版も行っている。これまでに、ビルマ、カレンの民話を含む『アジアの民話』、『HIV/AIDSについての絵本』、『折り紙マニュアル』、『子どもの権利』、『カレンのジョーク集』を出版した。しかし、出版は非常に時間と資金がかかるため、難民が自ら本を出版できるように、謄写版の使い方の研修を行った上で、謄写版を図書館に配布した。短編小説が彼らによって印刷されている。

## 触媒としての援助団体

私は2000年から2001年までミャンマー難民支援図書館プロジェクトの責任者として活動して、うれしかったことはつらかったことと同じくらいたくさんある。その中の一つは、キャンプのリーダーが、10以上もある援助団体の中でSVAが一番好きだと言っていたことだ。理由は、SVAは難民を受益者として捉えるのではなく、自分たちの生活の良くしていく主体として捉え、難民の力を高めるための支援をしてくれたからだという。



絵本を読む子どもたち

SVAの創立者で専務理事であった故有馬実成氏は、私たち援助団体は「触媒」とであるとスタッフによく言った。触媒は、化学反応において何ら自らに変化を生じることはない。しかし他者を活性化させ、変化の速度を速める。

難民は、力のない、かわいそうな、みじめな人たちでない。困難な状況のなかで生きる力と誇りを持っている人びとである。援助団体の役割は、彼らの力を高めるためのきっかけを作ることである。

## 三宅 隆史 (みやけ たかふみ)

(社) シャンティ国際ボランティア会  
事務局次長兼海外事業・企画調査課長

1962年広島市生まれ。1986年3月広島修道大学人文学部卒業(社会学専攻)。1986年から日本ユネスコ協会連盟、1994年から(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA、旧称:曹洞宗国際ボランティア会)に勤務。タイ・カンボジア・ラオスにおける教育協力活動の後方支援、地球市民教育、政策提言、調査研究活動を担当。2000年から2001年までタイ・ビルマ国境のメーサリアン事務所長として、ミャンマー(ビルマ)難民支援事業を担当。

〒160-0015 東京都新宿区大京町31 (社) シャンティ国際ボランティア会(SVA) phone: 03-5360-1233 fax: 03-5360-1220  
e-mail: miyake@sva.or.jp, URL: <http://www.jca.apc.org/sva/>

